

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

A. コースワークの充実・強化

③国内外の大学との単位互換協定やダブル・ディグリー等による教育課程の充実

●名古屋大学国際開発研究科

「国際協力型発信能力の育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

海外の大学とダブル・ディグリーについて交渉したことがある。しかし満足いく結果には至らなかった。

(苦労したこと、困難であったことの詳細な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

第一に要因は、金銭的な問題である。相手方大学の学費は本学の約3倍である。しかも、学生が参加する場合には、両方の大学に学費を納めなければならない。残年ながら、相手方大学から学費の減免を期待することが出来なかった。第二は、修学年限の差である。相手方大学は、1年の修士課程を用意しており、こちらとのアンバランスがあった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

当該大学とのダブル・ディグリーの導入の交渉は頓挫した。参加学生への経済的な支援は不可欠であるが、それを確保することは不可能であった。

2. 取組を進めるに当たり困難であった事例について

D. 産業界、地域社会等多様な社会部門と連携した人材養成機能の強化

①国内外におけるインターンシップ・フィールドワークの充実

●名古屋大学国際開発研究科

「国際協力型発信能力の育成」の事例

(具体的に何を実施し、何が困難であったのか)

ある国際機関とインターンシップ協定の締結を試みた。しかし、あちらのモデル協定によれば、学生に緊急事態が発生し移送しなければならない場合や学生が何らかの損害を当該機関に与えた場合、本学に支払い請求が行われるとの条項があり、受け入れることが出来なかった。

(苦労したこと、困難であったことの具体的な要因は何だったのか、それにより実施内容がどのような影響を受けていたのか)

国際機関の場合、英米的な契約概念がしっかりしており、詳細な規定が置かれている場合がある。法律知識に乏しい場合、対処が困難である。また、学生の責任を大学が負うことは不可能であり、大きな障害となった。

(どのように対応し、どのような結果が得られたのか、また、その結果が望ましいものではなかった場合、あらかじめどのように対応していれば適切であったのか、どうすればより良い結果を導くことができたのか)

インターンシップ参加学生との間で誓約書を交わすことにし、損害を起こした場合などは学生の責任であることを明記した。そうした、誓約書を準備したにもかかわらず、相手機関は、規定の変更を認めず、交渉に行き詰まりを生じている。